星の崇高と花と艶麗とは秘めてみな詩人の胸底にあり。而も其美や造花の妙萬有の美と相觸れて、倏然として風雲を捲き虹霓を現じ、更に化して万朶の華を綴る。寔に靈妙の詩は鏤鈿の巧工を覬ふに似たるぞかし。

紫紅集は當代名家の傑作を輯めたるもの、金沙碧玉の光相映じて鏤鈿の巧工は字句の間にひそめるを。蓋し吾おほけなくも此集を輯めんとして強て名家が金玉を請ひ得たるものは、實に斯道の振興をねもふの切なるが爲めのみ、豈他あらんや。

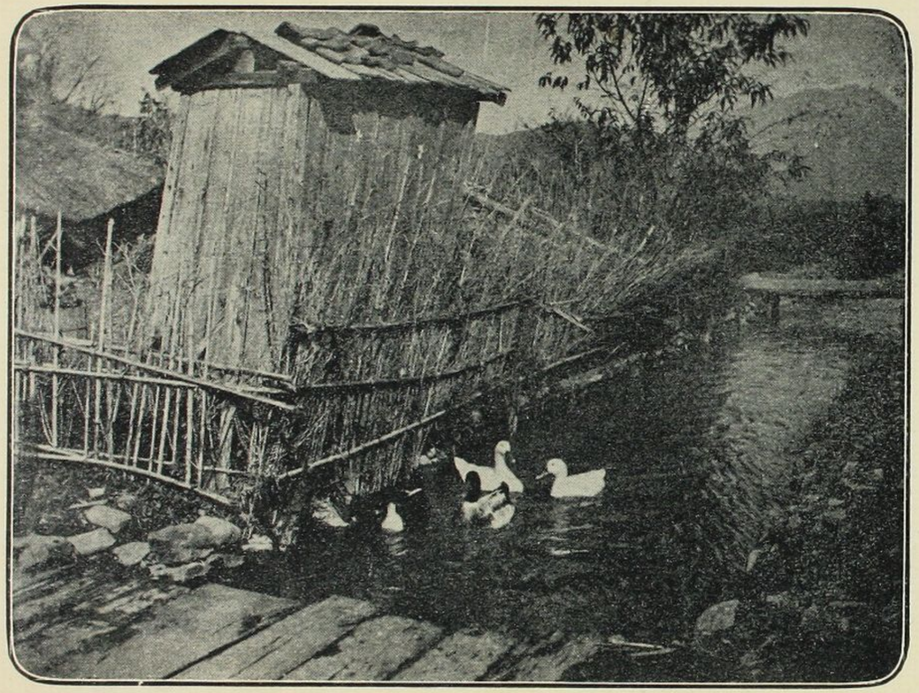
然れども又こゝに吾悪詩をも列ねて猥に名家の位をけがすものは一に潛越の譏を免れずと雖、詩癖遂に抑制する事の難きなり。想ふに名家の衆美は吾が醜悪を蔽ふものあらむ。幸に讀者吾が失態を咎むる事勿れ。

明治三十三年九月

栗島狹衣識

目次

寂寥…（新体詩）……島崎藤村……一
闇夜樹畔に立ちて（同　上）……薄田泣菫……一三
夕の歌…（同　上）……一六
志太の家づと…（和　歌）……中村秋香……二〇
をり〳〵草…（同　上）……二三
愛らしき子…（新体詩）……二四
花がめ…（同　上）……二五
春ゆく水…（同　上）……栗島狹衣……二八
繪師…（同　上）……三三
人嬬…（同　上）……三八
月の譜…（同　上）……四一
菫の歌…（同　上）……蒲原有明……四四
鶯に寄する歌…（同　上）……四七
せゝらぎ…（同　上）……五〇
淳田の海幸…（同　上）……坂正臣……五四
似而非歌…（和　歌）……森しづか……五七
友を戀ふる歌…（新体詩）……與謝野鐵幹……六二
松の落葉…（和　歌）……七五
美人嘆…（新体詩）……八三
少女嘆…（同　上）……松下曲水……八七



田家水禽

歌反古……（和歌）……落合直文……一〇〇

詩商人……（新体詩）……谷活東……一一七

隅田の夕……（同上）……一二一

兵士の妻……（同上）……一二五

牧童の歌……（同上）……山本露葉……一二八

紫

いかり……（同上）……一三一

夕の星……（同上）……一三二

無花果……（同上）……一三四

養蠶……（新体詩）……小杉榲邨……一三六

をりふし集……（和歌）……服部躬治……一三八

花の吟……（同上）……渡邊文雄……一四四

紅

牧兒の歌……（新体詩）……武島羽衣……一四七

古郷……（和歌）……佐々木信綱……一五〇

花くだし……（同上）……一五二

竹外横斜……（同上）……坂井久良岐……一五五

角力のうた……（同上）……一五七

集

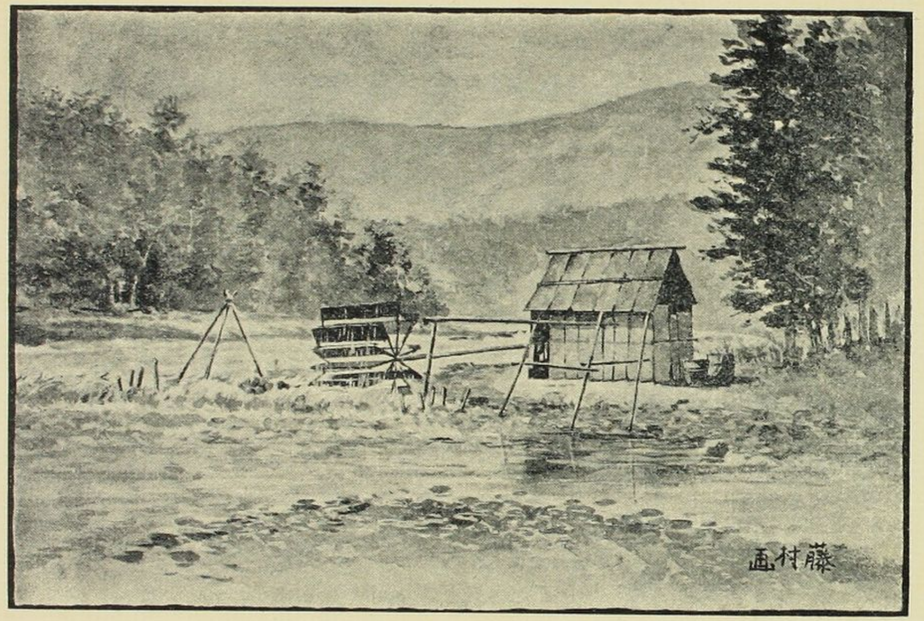
雜吟……（同上）……一五九

さくら……（新體詩）……大塚楠緒子……一六四

小『さきゆめ』……（同上）……一六五

梅雨一束……（和歌）……小出粲……一六九

瀧園百首……（和歌）……黒田清綱……一七二



武州青梅驛

紫紅集

寂寥

島崎藤村

岸の柳は低くして
羊の群のえにまがひ
野茨の幹は埋もれて
流るゝ砂に跡もなし
蓼科山の山なみの
麓をめぐる河水や
龍住む淵に沈みては
鴨の頭の深みどり
花さく岩にせかれては

天の鼓の樂の音。

さても水瀨はくちなはの
かうべをあげて奔るごと
白波高くわだつみに
流れて下る千曲川。

あした炎をたゞかはし
ゆふべ煙をきそひてし
駿河にたてる富士のねも
今はさびしき日の影に
白く輝く墓のごと。

はるかに沈む雲の外

これは信濃の空高く
今も烈しき火の柱。
雨なす石を降らしては
みそらを焦す灰けぶり
神ゆめさめし天地の
開けそめにし昔より
常世につもる白雪は
今も無間の谷の底
湧きてあふるゝ紅の
血潮の池を目にみては
布引にすむはやぶさも
翼をかへす淺間山。

あゝ北佐久の岡の裾

御牧が原の森の影
ゆめ驅けめぐる旅にねて
安き一日もあらねばや
高根の上にあか〳〵と
もゆる炎をあふぐとき
御谷の底の青巖に
逆まく浪をのぞむとき
かしこにこゝに寂寥の
其の味はにがゝりき。

あな寂寥や其道は
獸の足のあとのみか
舞ひて見せたる大空の
鳥のゆくへのそれのみか。

さてもためしの燈火に
若き心をうかゞへば
人の命の樹の蔭に
花深くさき花ちりて
枝もたわゝの智慧の實を
味ひそめしきのふけふ
知らずば、なにか旅の身に
人のなさけも薄からむ
知らずば、なにか移る世に
假の契りもあだならむ。

一つの石のつめたきも
萬の聲をこゝに聽き
一つの花のたのしきも

千々の涙をそこに觀る。

あな寂寥や吾胸の
小休もなきを思ひみば
あはれの外のあはれさも
智慧のさゝやぐわざゞ、是。

かの深草の露の朝
かのきさかたの雨の夕
またはカナンの野邊の春
またはデボンの岸の秋
世をわびゞとの寢覺には
あはれ鶉の聲となり
うき旅人の宿りには

ほのかに合歡の花となり
羊を友のわらべには
日となり星の數となり
麥に添ひ寢の農夫には
はつかねずみとあらはれて
あるは形にあるは音に
色にほひにかはるこそ
いつはり薄き寂寥よ
いづれいましのわざならめ。

さなり、たもては冷やかに
いとつれなくも見ゆるより
深き心はあだし世の
人に知られぬ寂寥よ

むかしいましが雪山の
佛のゆめに見ゐしとき
かりに姿は花も葉も
根もかぎりなき藥王樹。

むかし汝は沅湘の
水のほとりにあらはれて
楚にすてられしあてびとの
熱き涙をぬぐふとき
かりにいましが長沙羅の
鄂渚の岸に生ひいでゝ
ゆふべ悲しき秋風に
香ひを送る蕙の草。

または汝かバトモスの
離れ小島にあらはれて
歎き仆るゝひとり身の
冷たきゆめをさます時
かりに面は照れる日や
首はゆふべの空の虹
衣はあやの雲を着て
足は二つの火のはしら
默示をかたる言の葉は
高きつばの天の聲。

想へばむかし北のはて
舟路佗びしき佐渡が島
雲にこひしき天つ日の

光もうすく雪ふれば
毘藍の風は吹きおちて
梵音聲をおどろかし
岸うつ波は波羅蜜の
海潮音をとゞろかし
朝霜ふれば袖とぢて
衣は凍る鴛鴦の羽。

夕霜ふれば現し身に
八つのさむさの寒苦鳥
ましてや國の罪人の
安房の生れの栴陀羅が子を
あな寂寥や寂寥や
ひとりいましにあらずして

天にも地にも誰かまた
そのかなしみをあはれまむ。

げにひるの夢夜の夢
旅の愁にやつれては
日も暖に花深き
空のかなたを慕ふとき
なやみのとげに責められて
袖に涙のかゝるとき
汲みて味ふ寂寥の
にがき誠の一杯。

秋の日遠し、あしたにも
高きに登り、ゆふべにも

流れをつたひ、獨りして
ふりさけ見れば鳥の影
天の鏡に舞ふかなた
思ひを閉すあや雲の
浮べるかたを望めども
都は見えず、寂寥よ
來りてわれと共にかたりね。

（完）

闇夜樹畔に立ちて

薄田泣菫

人香無き間の手がらみ
囲象沼の葦に立ち
伏目にけぬるき水をまもり
半夜現形に凝る頃
倚るは櫟の木がぐれ
依々たる夜の氣額にふれて
呼吸切にふさぐ迄
惑へる心を惱ましむる。
天路に走る流星の
遠き方に入る如く

運命背に吾を載せて
行方那邊と知るべき
死と夜と闇と恐怖の
跌める未來を思ひやれば
疑ひ胸にみだれて
現當如何にと分ち難き。

薫吹く日のあかつき
谿間くゞる水に似て
幸ある姿に歌ひ行けど
ゆくて柏の木がくれ
淵におつべき宿世ぞ
來し方快樂の情をこめて
日毎誦したる唱歌の

孰れか辭世の調ならぬ。

木精もねむる眞夜中
花にふせる若人の
悲しきかたちを星は見るか
疑解せぬ地の上
詩歌、懸想、領ありや
清きは絶えたる土にたちて
理想も何の力ぞ
吾今現世のいのち咀ふ。

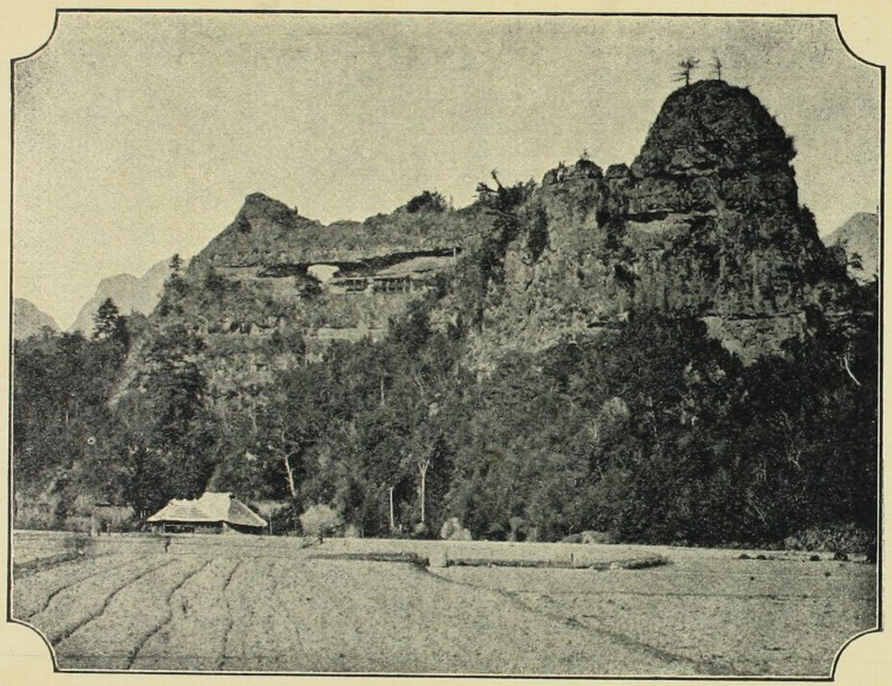
運命人を傷めて
この惑を泣かしむ
願ふは死の手か希望なくも

常の平和其處にあり
罪と汚の酬
人の子吾名を忘れ去るも
遠くかゝる星に似て
榮ある胡座を享けぬべきぞ。

夕の歌

（母戸に立ちて謠ひたる）

夕となりぬ、日暮れぬ。
黄雲細く旗捲けば
天路に逼りし影も落ちて
晝の職務世をば去り
繼いで來たる闇き夜の
小姓か、金星近く降り



豐後耶馬溪古羅漢寺

繼子門に凭る如く
目尻も濕みて此處を目守る。

日暮は人を痛めて
野の旅路を思はしむ。
吾子は巡禮　遠く行きて
消息得ざる悲しさよ。
ほむる性の柔和をも
愚かや異鄕の仇と怨じ
鳩に似たる胸の血の
恐怖に凝るやと心腦む。

汝が行く路のゆふぐれ
遠き京の方しらず

磧に冷えたる石に伏すも
絶えず祈りて地に呼べ。
和讃を誦する心は
枯野を變じて花に飾り
沙漠越ゆる人の子が
青きを認めし思見する。

高き臺も望まじ
薫る衣も願はず
蹉跎たる斯世の長き旅に
荆棘、薊の路より
吾兒ひきたき許りぞ
行きしは巡禮、この夕暮
哀情切に泣くとも

母戸にすがりて指は噛まじ。

（完）

志太の家づと

中邨秋香

志太の温泉にありけるときかしこの教子なる阪巻鎧治が時が谷の梅見にゆきたりとていと大きなる枝にろへて

いたづらに見て歸らんがをしければ
をりて一えだたてまつるなり

とあるに

手をりこし此の一枝にかくはしき
君がこゝろのいろも匂へり

此うめを瓶にさしてかたへにおきて

梅か香をやがて夢路のしるべにて
よごとにたどるときがやのさと

潮生舘の梅そのゝ花さかりに一日ばかり

てれくらむみやこの友へつけやらん
しだのうめぞのいまさかりなり

一月十二日外窓主人よりつれ〳〵のなくさめにもとて龍眼肉をいとさはにめまぐれたるに

名こそことやうなれ、たれか龍の眼をしりけん、
またその肉をは味ひけんとをかし、楊貴妃がめでたりといふは、荔枝とまがへいへるにぞあるべき、げに大かたはいとよう似たるものゝ、これには紅塵一騎妃子笑ともいひかたくやとおもふも、猶名のいみしき故にもやあらん、和名鈔に龍眼木とみえたるは檔の類にて、これにはあらずとぞ、宇治山の木のめにはさらなり、砂糖すこし加へたる麥湯にそへたる、はたいひしらずかし、今これをいとさはにえてよろこひうたふ

われはけふ龍のまなこの肉をえぬ

なにかあぎとの玉をいふへき

田中のさとの教子岡信則は赤十字社の社員たるが靜岡縣社員の寄附金未納者のいと多きをうれたみて「しつはたの山の櫻はにほふなりこかれの花よなとかさかさる」とよめりしに總裁小松宮殿下聞しめされてめでさせ給ひやかて役員にあけられたるよし物かたるに

吹きさそふことはの風にけふよりは

まなくこかねの花ぞちるべき

潮生館のゆむろにて日ごとにものいひける名古屋人加藤傳七郎氏とかへるといふに

いくとせの春秋かけてこのさとの

花にもみぢに君とかたらん

さろはことしの秋はまたなどいへれはおりけり

烟花老人にかきておくる

あけくれのゆむろの友となれ〳〵て

中あたゝけくなりし人かな

三月四日東京へかへらんとていてたつ

こゝろからあこかれいてし旅なれと

かへるといへはうれしかりけり

をり〳〵草

花の頃隅田川にて

こぎ捨てゝ誰花かげに浮かるらむ

つながぬふねに夕風のふく

百花園にあそびて故捜磐翁をしのぶ

花やしき見し世の友は影もなし

庭はむかしのさながらにして

月下花

花故にくれずと思ひし木の本は
おぼろづく夜となりしなりけり

尋山花

柴人の敎へしみちやたがひけむ
花ありげにも見えぬ谷かな

山路花

おも白くあゆみの進む山路かな
ゆけどもゆけど花かげにして

愛らしき子

（一）

秋風さむき　昨日けふ
まなびの窓に　まさきくて
つとめやくらす　おぼつかな

便もたえて　三月ごし。

（二）

うれしきにつけ　うきにつけ
學びしはてゝ　かへる日を
先ゆびをりて　かぞへつゝ
そをせめてもの　なぐさめに

（三）

やけのゝ雉子　よるのつる
子をおもはぬは　なきよにも
なほたくひなく　いとしくて
杖ともたのみ　はしらとも

花がめ

みち年の桃の花吾は得たり

そのもゝをかめにさし
その瓶は窓のうちに据ゑぬ。
かくしあれば風吹くもよし
風吹かは門の柳の亂るゝ糸みむ
かくしあれは雨ふるもよし
雨ふらば庭の櫻の咲き散る花見む。
さくらはもいろこそにほへ
其の色はうつろひやすきを
やなきはもいとこそなびけ
そのいとはみだれやすきを。
このかめに挿したるもゝは
春風は吹けとみだれす
春雨はふれど移ろはず
あさよひにわがたゝむかふ。

文づくゑのともとめでつゝ
名にしおふみちとせ迄も
斯ながらゑみ榮えつゝ見む
みちとせの桃。

（完）

春ゆく水

栗島狹衣

一　筏士

簑きてくだす筏士が
唄おもしろき水馴掉
霞こめたる春さめの
花の軍をはらひては
春行く水に謂けらく。

はなさくやまにわきいでゝ
きしのすみれのかをひたし
やなぎけぶれるかはそひの
わがやのかどをゆくみづよ。

いまゆくはるのかをのせて
うしほのおともあたらしき
うみのかなたにいでんとき
なれがこゝろにたつなみの
いほへみだれてものおもふ
わがくるしみをしるやいさ。
なかこしやまのさくらばな
ながこしのべのつぼすみれ
ながこしさとのかはやなぎ
あゝそのいろよとこしへに
あゝそのいろよとことはに。
なれゆくみづのとまらねば
はるはながれておいぬべし
なれゆくとしのはやければ

わかきいのちもうせぬべし。
あなおそろしやいかだしが
みはうきふねのみなれざほ
かいのしづくにそでぬれて
みのおもげなるはるのあめ。
はるゆくみづにまかせては
なほいまさらにおいのみの
あなおそろしやおそろしや
はなきやまをかへりみて
はるなきさとをながめみて
あゝゆくみづよ吾をいかにせむ。

ことばはかなし楊柳の
愁はながきいきの緒に

繋ぎもあへぬうつろ舟
朽て甲斐なき老の身を
嘆き詫びては佇みて泣く。

二　この水

さらば此水せき入れて
玉敷く庭の池のおも
肥えてひれふるうろくづの
わかきいのちをやしなはん。
さらばこの水くみあげて
青花瓶にさすはなの
紅ふかくとことはに
わかきいのちをやしなはむ。

花鳥双美　　長田憲香女史筆

さらばこの水くみ入れて
ひそかにかゝむ水くきの
筆のしづくも匂ふまで
君かかたへとことつてむ。

そは耻かしき人の身の
よそを憚るわざなれど
今ゆく水をあだにして
また此春をもとめむや。

歩み移して手をのべて
汲まむとすれば水かゞみ
うつる姿のいたく痩せたる。

繪師

牧場を巡るせゞらきの
岸のまさごをあらひては
すみれはなさく草のみち
水車かゝれるかはぐまの
やなぎの影をうかべては
みどり深くもよどむかな。

あゝ其の水よとこしへに
淀みて行かぬものならば
人のいのちもうつし世に
ながく殘りてあらましを
あゝその水よとこしへに
流れてやまぬものならば

ひとのこゝろも永劫に
そのはたらきを止めなむ。

岸のひづちは壌に落ちて
ながれは岩にせかれても
さかまく水のなからめや
さらばいのちは秋の日の
ゆうべの露のもろくとも
こゝろはながき春の日に
あしたの花の香もたかく
世々に殘りてわらましを。

やなぎは垂れて日は霞み
胡蝶のはねもたゆげなる

こぞのまき塲の春にきて
埒に眠れるうしかひが
夢あたゝかきまひるどき
きみは繪筆を手にはして
微笑みてこそ居たりしか。

梅のはやしにつゞきたる
小山がすその菜ばたけに
つま木になへる山かつが
しばしくゆらすけぶり草
畑にたてるかげろふの
はかなき影のみゆるとき
きみは繪筆を手にはして
微笑みてこそゐたりしか。

まき場の牛は生ひたちて
納屋の夕日に餌をあさり
小山がすその菜ばたけに
猶かげろふのもゆる日は
見し世の春にかはらねど
あゝ牛かひよ、山かつよ
汝はこゝにあらざるか。

さくら花さくふるでらの
かしこにおほき墳墓に
あゝあたらしき我が友が
名を刻むこそはかなけれ
彼の牛かひよ、山かつよ
汝もこゝにあらざるか。

亡き我が友が繪ごゝろの
たくみに入りし賤の男が
いのちは水のゆくがごと
歸らぬものとなりぬるを
名を傳ふべきはたらきの
たゞ殘らぬはかなしや。

されどたふとし、萬象の
美妙をうけて生ひいでし
わがなつかしき友の名の
ながきほまれは行く水も
よどみて淵とたまるごと
殘るこゝろはかぎりなく
こゝの野山にひそむらむ。

あゝたふとしや歌人の
こゝろは世々の春をえて
すみれの花とさきそめて
胡蝶のゆめをやどすなり
あゝたふとしや我が友の
こゝろは千代の春ごとに
繪絹は野べのうすがすみ
その筆の香の花に殘れる。

人嬬

紫草能爾保敝類妹乎爾苦久有者
人嬬故爾吾戀目八方

桃さく春はかへれども
君が姿を若草の
匂ふあたりに負むべき
月澄む秋は遠けれと
君がこゝろを八千草の
あだなる者と思はむや。

花咲きをゝるさと川や
みづの流はきよからで
たぎちて落つる白瀧よ
淵瀬に花のかげぞなき。

愁へをやめよ我妹子よ。
春うつくしき深山木も
知られで花の咲くものを。

されどみ空の夕ぐれに
星のひかりを仰ぎ見て
わかき命をれもふとき
密にきみがおもかげの
昔をしのぶことあらば
うら耻しきかなしみに
涙はおもきものおもひ。

暗雲閉ぢて日はくれて
春は老いたる窓のうち
きみが手馴の琴の音を
夜々吹くかぜに擬へて
くるふ心のいたづきに

たゞかりそめの手枕や
夢ばかりなる面かげの
語るを聞けば嬉しきに
袖をひかへて密かにも
あゝ人嬬よゆるせかし
かくもやさしき君故に
戀の命はなどか老いなむ。

月の譜

大庭の花にあらしの吹きたえて
弘徽殿に公達ゆくやおぼろ月。

〇

おばしまの月は霞める高殿や

姫君がふりのたもとに花ぞちり來る。

○

さや〳〵と誰が行水の水のおと
瓢箪や櫻子にあをき月の影。

○

雨は晴れて虹こそかゝれいさゝ川
葦分け小舟掬網ひく人

○

月までは風もすゞし川添の里
そのむかし我庵なりき瓜畠。

○

山門に松ふくあらしたふ〳〵と
番僧が初夜つく鐘に月冴えわたる。

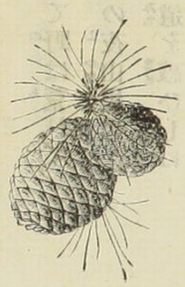
○

小簑きて笠重げなる人やたれ
雪晴れて月下に叩く柴の門

○

芒原芒はかれて霜ぞしろき
城跡や雨黒くして鬼なくといふ

（完）



菫の歌

蒲原有明

小狐鳴きて野は荒れて
きのふ冬の夜山里に
馴れし夜道を惑ひしは
誰が少女子かまた問はじ

さにてはなきや昨日こそ
冬のあはれはこもりしか
古井のかげよ今日はまた
追憶ねはき草の花

くぬぎ梢は高けれど

若芽さ枝に匂はずば
春來てこの日甲斐なきを
ひとりゑまへり菫のみ

慧きがゆゑに優しくて
情知る子が物おもひ
その子の姿しのべとや
ひとりゑまへり菫のみ

流れて清きよろこびの
泉にかゝる琴の絃
そをかりそめに搔きなでて
あらぬ調を世々傳ふ

さしもに難きよろこびや
世の秘めごとを忘れてぞ
いやまし人は嘆く日に
匂ひは深き花すみれ

常盤の緑葉を重ね
森の香いかに高しとて
汝が匂はしのくちつけに
はたその夢に替ふべきや

神の心は幽かにて
人知る際にあらねども
染めて消えゆく浮雲に
ゆふべ菫の色かよふ

雲や一時よろこびの
さは惜しまるゝ影しめす
古井のかげよ世にはまた
追憶おほき草の花

鷗に寄するの歌

幽情遠く湧き出でゝ
盡きせぬ泉胸にあり
過ぎしは三歳旅の空
その日のゆふべ憶ふにも。

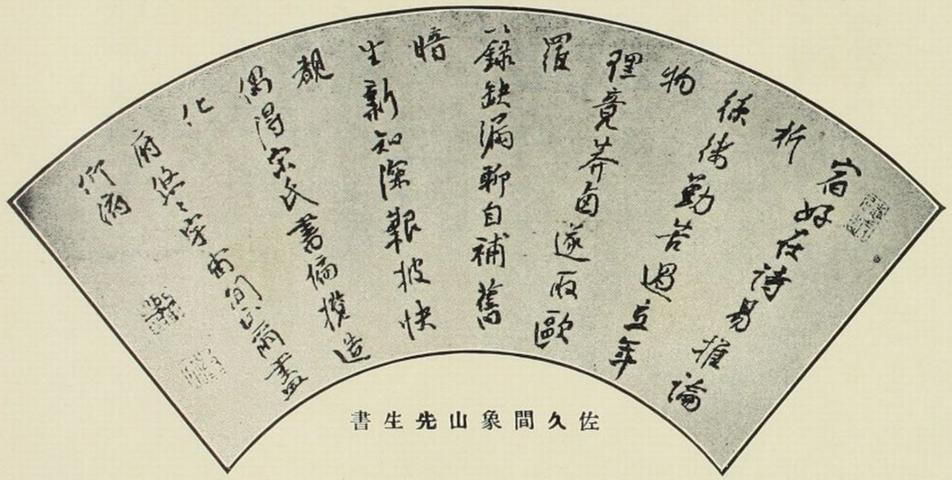
涙たゞよひて海暮れて
舟島かげを漕きくれば
鷗つばさの白くして

ひとり汐げの暗を行く

苦吟あやめも分かぬ時
靈光頭を射る如く
鷗よ初め汝を見て
心竊かに驚きぬ。

嗚呼塵染めぬ翹かげ
身を納るべくば嘻しきに
思へば神の命あらで
人の子高き幸得んや。

鷗よ行方遠からむ
消え去る影を惜めども



可怜小汀のいつこをか
汝の戀ふとも知らざりき

一夜礁越す濤の音
碎けて夢のさめし時
惱む身ひとりあくがれて
かの大海の果おもふ。

可怜小汀か甲斐なくも
問ふは幾たびそも何處
八汐路難き沖の上
夢浮舟の末かなし。

鷗よ旅に別れきて

三歳かく迄我やせぬ
今朝汝が魄の誘ふにか
思ひかろしやあやしくも。

せゝらぎ

狂調

人まよはしの歌うたひ
あてなる女神なほすまば
危き海はへだつとも
涙しのきてもゆかましを。

まぼろしたえて嵐吹き
小舟朽ちなは歸りこじ
夕ばえ媚ぶる島かけの

たのしき岩屋そもいつこ。
情いつはる國遠く
うきゆめとはぬ夜をいねて
女神一たび手をかさば
何悔あらむとこしへに。

白百合

野は夏深ししらゆりの
花誰かために醒めぬらむ
夢の清きもすてはてゝ
見つるや何そ人の世に
いろには出でぬ花の醉
汝かしろかねのさかつきに

よろとび多き香を酌めば
いつ誘はるゝわか思ひ

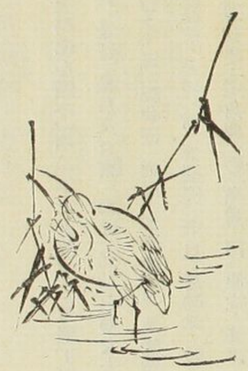
いつ誘はるゝ思ひぞや
かの見し少女しのぶにも。

神のまつりの日を祝ひ
うかれし都慕はれて
いくとせ別れ甲斐なきを
さればかへらむ憂の旅。

駒にぬたみはあらせじと
かくは野山にしたしみつ
またかの君にめくりあふ
夕をかけてちかひなむ。

匂ひはわかき白百合よ
かはかり戀はつらかりき。

（完）



淳田の海幸

坂正臣

仲哀天皇紀を讀みて「二年三月癸丑三月朔丁卯天皇巡二狩南國一。於レ是留二皇后及百寮一而從二駕一三卿太夫、及官人數百一而輕行之。至二紀伊國一而居二德勒津宮一。是時熊襲叛之、不二朝貢一。天皇於レ是將レ討二熊襲國一。則自二德勒津一發之。浮レ海而幸二穴門一。即日使二遣角鹿一勅二皇后一曰、便從二其津一發之、逢二於穴門一。夏六月辛巳朔庚寅、天皇泊二于豐浦津一。且皇后、從二角鹿一發而行之。到二淳田門一、食二於船上一。時海鯛魚、多聚二船傍一。皇后、以レ酒灑二鯛魚一々々即醉而浮之。時海人多獲二其魚一。而歎曰聖王所レ賞之魚焉」とあるに至りて、其の時の人のこゝろになりて詠める古長歌、

安藝の海淳田のあたりに
舟うけて海人ぞ噪ぐ
何取るとかくは噪ぐ

鯛取るとかくぞ噪ぐ
網無しに鯛取り得めや
釣せずに魚取り得めや
海人の子が心や狂ふ
船人が氣かも上れる
あな煩さをこの旅人
汝は知るや汝は知らめやも
大君に穴門に逢はむと
后の宮角鹿をたゝし
此處にしも船がゝりして
御食せし御酒の餘を
船ばたに喰喎ひ寄りて
鯛の魚にそゝがしかば
飲み醉ひてたまはり飽きて

もろ人の赤手に獲らる
かしこさやひじりの君の
たひの魚賜物の幸山のさち
船に打積みて歸り來る
彼の船見ずやをこの旅人

（完）

似而非歌

森しつか

よみさしゝふみ枕して眠る窓に
つれ〴〵と降る春の雨かな

○

子もり唄うたふ聲して驛路の
雨もしづかに櫻ちるなり

○

春の夜のあらしはれたる高窓に
オルガン聞ゆ誰がすさみぞや

『テレマック』を讀みて

春の月おぼろに霞む涙の上に
ユリスの船はもとむれどあらず

○

『思ひ』みだれ花の木の間をさまよひて
ユリスに似たる君を見しかな

白南なる友に

白南（ベーナン）の秋つげ來せし君が文を
ひもとく窓に春雨のふる

旅にありける日

春雨のはれむともせぬ旅の宿に
そこはかと無きわがこの思ひ

○

雨はるゝ一むらはやし月いでゝ
おぼろになりぬ山ぞひの里

○

ふして思ひ起きてながめし春雨の
はれゆく窓に春雨を思ふ

○

里の子が石なげ入れし花の影を
蝶ふたつ三つ驚きて立つ

逗子にありける日

江の島は眉に迫りし逗子の海の
霞がくれに富士を見るかな

いはゝ崎にて

隅田川くだす筏は矢のごとく
曉かけて春雨のふる

折にふれたる

勝負せし人は歸りて櫻ちる
テニスの庭に月おぼろなり

○

六〇

日向なだ風は尾上にせき止めて
霞わけつゝ行く白帆かな

○

名も知らぬ山の間に日は落ちて
湯けぶり白う桃の花散る

○

雲に入るチヤーチの塔の影くらく
柳をわけて月さしぼる

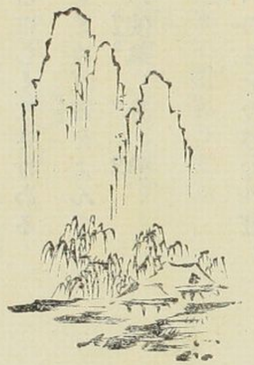
○

港出でし舟は霞につゝまれて
岬のあたり涙の花ちる

山家集を讀みて

惜みつる花は梢にちりはてゝ
無明の醉のさむる此の頃

（完）



友を戀ふるの歌

與謝野鐵幹

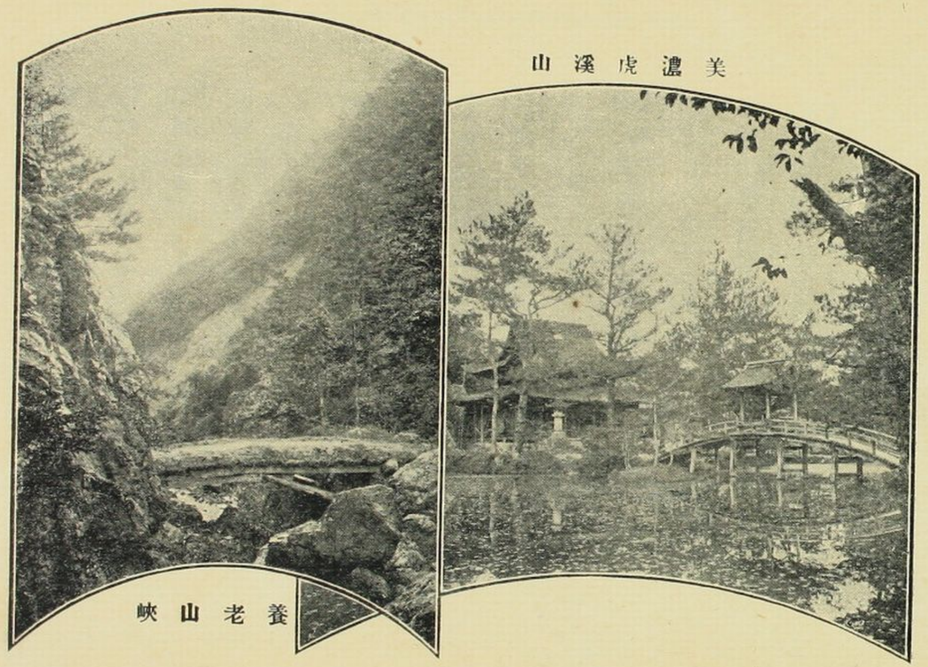
妻をめとらば才長けて
顏うるはしくなさけある
友をもとめば書をよんで
八分の俠氣二分の熱。

戀のいのちをたづぬれば
名を惜むかな男ゆゑ。
友のなさけをたづぬれば
義のあるところ火をも踏む。

斟めやうまし酒歌ひ女に
をとめの知らぬ意氣地あり
簿記の筆とるわか者に
まことのをのこ君を見る。

嗚呼われコレッチの奇才なく
バイロンハイチの熱なきも
石を抱きて野にうたふ
芭蕉の寂をよろこばす。

人やわらはむ業平が
小野のやま里雪をわけ
夢かと泣きて齒がみせし
むかしを慕ふむらこゞろ



美濃虎溪山

養老山峡

見よ西北にパルカンの
それにも似たる國のさま
あやふからずや雲裂けて
天火ひとたびふらん時。

妻子をわすれ家を捨て
義のため耻を忍ぶとや。
遠くのがれて腕を摩す
ガリバルヂーやゝま如何。

四たび玄海の涙を踰え
韓のみやこに來て見れば
秋の日かなし王城や
むかしにかはる雲の色。

玉をかざれる大官は
みな北道の訛音あり。
慷慨よく飲む三南の
健兒は散じてかげもなし。

嗚呼われいかにふところの
つるぎは鳴をしのぶとも。
むせぶ涙を手にうけて
悲しき歌の無からめや。

わが歌ごゑの高ければ
酒にくるふと人は云へ。
われに過ぎたる希望をば
君ならではた誰か知る。

「おなじ憂への世にすめば
千里の空も一つ家。
おのが袂といふなかれ
やがてふたりの涙ぞや。」

はるばる寄せしまゝすらをの
うれしき筆を袖にして
けふ北漢の山の上
駒立てゝ觀る日の出づる方。

舞妓君子

その一

韓のみやこのつれづれに
こよひあひ見る酒のまへ

うまれはなじ西京と
先づきけるこそ嬉しけれ。

いかなる親のこゝろより
千さとへだゝるあら國へ
いとし愛娘をわたらせて
何とてさする憂きつとめ。

十四十五ははつはなの
まだ戀しらぬあどなさを
ことば訛れるうかれをに
もてあそばるゝ是非なさよ。

その二

みづにのぞめるしら梅の

雪のはだへのけだかきに
つきをかけたる紅梅の
襟にあまれるにほひかな。

舞のすがたにふさはしき
はるの小室のはなあふぎ
唄のこゝろにかよひたる
あきの嵯峨野の裾摸様

ゆたかにあがるふり袖に
この世をつゝむ風情みえ
かろくかざせる舞の手に
ほとけを招くちからあり。

その三

ふるさといでゝ我もまた
十とせあまりを旅のそら
はからず逢へる君ゆゑに
よろづむかしの忍ばるゝ。

ともに憂身を語りなば
酔ひたる酒もさめぬべし。
しばし皷の手をやめて
わがさかづきを受けよかし。

君がそだちし祇園なる
神のやしろの花の精
いつかあどなき頬に入りて
そのゑくぼとはなりにけむ。

うの四

水にれちたるむくろじの
くろめがちなるまなざしを
羽子のはぬよりなほかろき
人のなさけにそゝぐなよ。

雨にほころぶる丹つゝじの
そのいぢらしきくちくれない紅を
花の露よりなほもろき
人のこゝろにうつすなよ。

をとめの春のたのしさは
たゞれびどめの蝶のゆめ
指なるたまにたれの名も

まだ見えぬこそさかりなれ。

廻燈籠

あしたに冠の風を彈き
ゆふべに衣の垢を洗ふ
那智の神山瀧百尺
淹留三月秋に入りぬ

白龍ながき髯を垂れて
八百八島夏寒し
五大堂下の夢いづこ
松の月松の風松の雨

單驕城を出でゝ闇をつく

夏草ふかし孔徳里
好機また無し立つや立たずや
將軍うなづく蚊遣のかげ

我に大雅の口韻なきも
君に玉瀾の繪筆あり
清瀧の茶屋嵯峨の茶屋
竹にいねたる涼しさよ

紫　黒　吟

河に沿うて柳原一里家ところ〴〵水車のひゞきに
はとりのこゑ

○

歌に痩すと世には言はせて忍び〳〵つるぎの錆を
拭ふ君かな

○

誰やらに似たりと思ふそれのみに賣らで已みたる
古ひいな哉

紫

○

花どきを錢もあらぬに浮れ出でゝ賣りし我歌もの
にかゝれぬ

黒

○

藤村は信濃を出でず泣菫は備中にあり春雨の空

吟

○

花どきを出雲よりくる拗ね男今の劉郎大町桂月

○

おぼろ夜を竹屋の渡し乘合の中におはしぬ萩の舍
先生

○

江戸ッ子のちやき〳〵男明治男學者男の外山正一

○

我親とこゝろやすきに兄の名の我名も附けし大田垣蓮月

○

もろともに往なんと云ふを心ならず振りすてゝこし韓の妓翡翠

○

向島の名物男寒月が隣に栖める新派畫家素明

○

橘香に書けと乞はれて紫のインキいやしき我れの反古歌

松の落葉

おもふことありてよめる

もみぢ葉は里のうなゐもひろひけり
松のおち葉に泣く人や誰。

落葉三首

こほろぎのよわるこゑにやこぼれけん
霜にまじれるつたもみぢ哉。

○

船とめてうたひし春は夢なれや
柳こぼるゝ川づらのさと、

○

岩淵の眞青なる水に夕づく日
うらゝにさしてちる紅葉かな。

舞ひさがる龍のすがたの老松に
もゆるほのほのつたもみぢ哉。

冬の歌よめる中に三首

しろがねの月のみやこの殿づくり
おもかげ見する霜ばしら哉。

○

熊鷲のしぐれて立てる沖の岩に
虹あらはれてさす夕日かな。

○

あかつきわびてや鴨は立ちにけむ
河の洲しろくおける霜かな。

朝鮮にて旅中の作三首

うまやぢの柳の霜に駒つなぎ
船まちをれば雁なきわたる。

○

氷ふむ馬のおとより夢さめて
朝風さむし川づらの里。

○

馬わたすやま川ゐせき霜さえて
なびくけぶりに星ぞのこれる。

海の邊りにて二首

海の名の皷もあらばうちつれて
舞はまく思ふ月の夜半かな。

○

この十とせひとめづつみのうみわたる
憂身やいかにな

○

御籤ひけば廿一吉とあらはれぬ

神も知らじな我がねがふところ

○

むらさきの組緒ゆら〳〵花笠の
紅きがなかに頬髭ある人

○

散る花を踏むが惜しさに一めぐり
めぐりてやみぬ神のみやしろ

○

花かげに炭の火吹きて茶碗やきて
詩をかき畵をかく山田寒山

○

花の宴狩衣きせぬうらみかな
信綱の君羽衣の君

○

わが強ひし歌の半をかきさして
咲子のおもと董つむなり

○

御手洗のさゝれに下りし一むらの
鳩の白羽に花ちりかゝる

○

山ふかき春の眞晝のさびしさに
たぐりても見るしら藤の花

○

わが好きは妹が丸髷くぢら汁
不動の呪文しら梅の花

○

地におちて大學に入らず聖書よまず
世ゆゑ戀ゆゑうらぶれし男

○

誰やらに似ると思ひしそれのみに
賣らでやみたる古ひいなかな

○

君を相す尋常詩家の派にあらず
みづから乘つな負けじだましひ

○

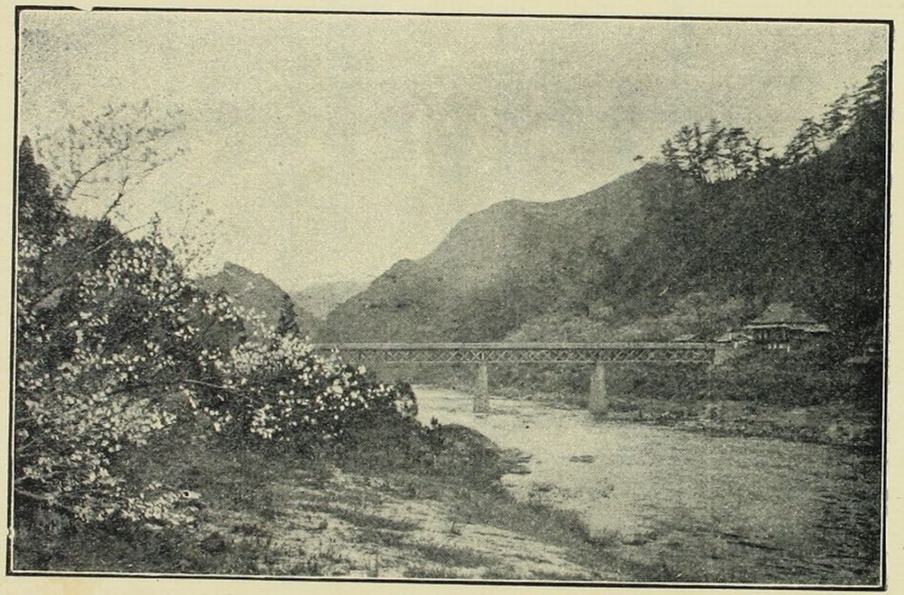
一笑す大棺は丹し小棺は白し
なにぞ眞畫をさかしら云ふ鬼

○

羅漢寺の十六羅漢なき親に
おもざし似たる羅漢名は何

○

人ならば酒をも強ひん枕刀



大和月が瀬

さびし幾とせ善き仇もあらず

○

舞殿にうつや小鼓大鼓

牡丹は醉ひぬ木蓮はまじめ

○

二の糸の切れしさながらつがでありな

眠れる蝶の夢もこそ破れ

○

痩せ痩せて手力はなし然かはあれど

歌にひとりの君を泣かせぬ

○

永き日を蓮の根嚙みて蓮の糸の

つきぬが如も物おもふかな

○

汕古りてうき草きよしひとり身の
鵞鳥飼はまく此處に庵せん

（完）

美人嘆

松下曲水

れひさきこもる窓のうち
われ美はしくおよすけて
いつしか人のとりどりに
くはしめとこそ聞えしか。

すきものとしもきく人の
われ顔よしといふめれば
音に聞きつゝ名にめでゝ
をとこのかぎり我を戀ふ。

まだ世を知らぬ若うど

ひとたび我を見てしかば、
にはかにこゝろ時めきて
戀てふことを知りそめぬ。

いはほを徹くますらをも
ほのかに我をかいまみて
こゝろの駒もくるひつゝ
たゞ一すぢにこひまよふ。

世の交はりのおもしろく
戀のこゝろのをかしくて
我はをとこに馴れつゝも
やうやく年はたけにけり。

とつぎしつべき頃ほひと
われもおもへば人もいふ。
あゝいかにせむ我が身今
早くをとこに馴れにしを。

とつぎしつべき年なれど
我うるはしくうまれ來て
たのしき戀をたのしとも
思ほえぬまでなりにけり。

我知るわが身うるはしと、
はるさりくれば山もせに
霞みのころもぬぎすてゝ
咲きにほふらむ花よりも。

そらのけしきも春めきて
しら雲みねにたなびけば
花見るひとはさはなれど
はなに見らるゝ人やたれ。

あめがしたなる少女子は
ひとりの人を戀ひにけり。
かくてぞ戀はおもしろく
楽しからましとこしへに。

あゝ誰かあるうるはしき
わがこの顔をきづゝけて
われを醜女となすものぞ。

誰か我が身をきづゝけて
さあらば我もはつごひと
あらたに戀を知りそめて
ひとりの人をしたひつゝ
あさゆふ思ひみだれまし。

あゝ我がともよ少女子よ。
戀をいのちとたのみつゝ
たづさはるべく思ほえば
ゆめ美し女となるなかれ。

少女嘆

山島は身を美しみ中々に
さつをが幸となりにける哉

おもふまゝなる若うどの
時めくさまをなつかしみ
ひとよおもひの夢のまに
吾はをとことなりにけり。

おもひかなはぬ少女子の
はかなきさがを嘲ちつゝ
ありしむかしを忍ぶれば
今はたのしき我が身かな。

われやうゝに時をえて
いゝもゆたかにとみ榮え
つかさくらゐも進みつゝ
我が名も今にとゞろけば。

あめがしたなる少女子は
こぞりてわれを慕ひつゝ
むかしの友もいつとなく
われ懷かしくなりにけり。

はしきひとりの少女子は
あきの紅葉のくれなゐの
ふかきおもひを堪へつゝ
一枝をわれにおくりけり。

吾もわはれは知るからに
をとめが戀をゆるしやり
厚きなさけをかはしつゝ

水もらさじとちぎりしを。
むかしの友はこひしさに
堪ふとはすれとにもたへず
篠のをずゝきみだれつゝ
ほにいでけりと知るからに。

あゝ我が友のうるはしさ
かゝる少女にしたはれて
吾とてこゝろなからじを
さきの少女はわすれけり。

よに少女子のさはなれば
はしき少女を見るごとに
我とておもひなからじを

さきのこひ人わすれつゝ。
されば少女はわれを戀ひ
かゝる少女にあふごとに
われは少女をおもひそめ
またいつしかとうち忘れ、

なゝの少女を戀ふるまも
やその少女にうつりつゝ
わが戀ひすてし少女子は
その數知らずなりにけり。

知るもしらぬも晩くとく
少女はわれを戀ひにけり。
少女といへばかならずに

われをしたふと思ふかな。
かならずわれを慕ひなば
かゝる幸ある身にうまれ
なほざりならむ少女子に
戀ひられぬとも何ならじ。

己れをとこのかひあらば
なほざりならむ子ならずて
甚じきあたりならずとも
おににくはれむ人もがな。

われは少女にあきにしを
よしさはなくと今はたゝ
戀ひてこふらむ人ならで

こひずて戀ひむ人もがな。
友にひとりのをとめあり。
なべて萬づにすぐるれば
こひずて戀ひむ少女こそ
いで其の少女ならましか。

されども友は戀ひざりき。
吾みづからとうち出でゝ
思ふおもひをしらすれど
少女はつひにこひざりき。

こひずばよしやさもあちば
强ひても思ひとげましを
すべもがなやと思ひつゝ

今ひとたびと說きけれは。
少女のすがたたちまちに
若きをとことかはりつゝ
己がすがたはまのあたり
もとの少女となりにけり。

かなしむ我をなぐさめて
友は我が手をにぎりつゝ
我が耳ちかくくちよせて
語り出でけりおもむろに—

「すぎしむかしの春のころ
ひとたび君を見てしより
わかきこゝろの亂れつゝ

われは戀路をふみそめき。
きみがすがたの清ければ
こふる男のさはなれど
皆これすべていたづらに
色香をめづるたはれごと。

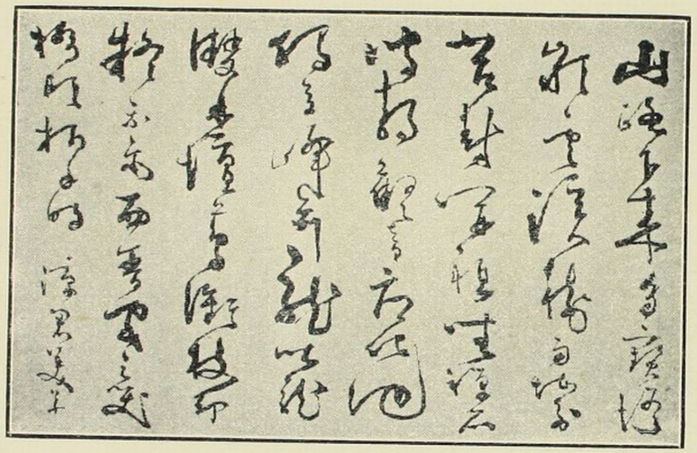
をとこの戀のはかなさを
君に知らするすべもがと
われ身を君とかへければ
君はをとことなりにてき。

をとこの戀のはかなさは
君をとこにて知りつらし。
きみが少女をこひたりし

その戀いづれまことなる。
君をしたふとよそほへる
をとこの戀のきたなさは
はちすのいけのいけ水か
はちす散れらば底やなに。

をとこの戀のあさき瀬は
かれ野の千草いろあせて
ふゆ行くたにのさは水か。
むすぶとすれは濁るらし。

きみを思ふといつはれる
をとこの戀のつねなさは
あきたつ空のむらさめか。



新井白石先生書

ふるかとすれば晴れぬらし。
をとこの戀の千よろづは
あきの野づらに舞ふ蝶か
草ばなあまた咲くときは
こゝろとまらぬ花あらじ。

いまは少女のかずまれに
をとこ多かる世なりけり。
をとこと聞かば心せよ
をとこと知らば近づくな。」

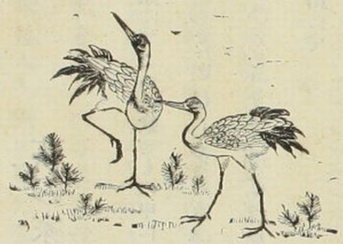
ま心こめてかきくどく
言の葉ぐさのつゆしげみ
人のなさけのうれしさは

身にしむばかり覺ゆれど、
少女となりしくやしさに
こゑも惜まず泣きければ
あゝまどろみの夢なりき
我が泣く聲にめはさめぬ。

あゝ夢ながら世のなかの
あまたの少女あざむくと
我がせし罪のおそろしさ
をとこの心いまぞしる。

夢にをとことわれなりて
始めて知りぬをとことは
きよき少女をあざむくと

この世に出でし鬼なりき。
をとこの心おぼつかな
我はこひせじをもひせじ。
ひとの言の葉あるものを
はかなき戀は何にかはせむ。



（完）

歌反古

萩の家主人直文

小田原にてよめる歌どもの中に

よる波をこはしといひしをさな子も
貝ひろふまて浦なれにけり

箱根山にて

山かごに今朝うちのりて箱根路や
むかしのまゝの旅をせしかな

歌の中山にて

月清みひとりこえきて二人まて
友にあひけり歌の中山

丹後紀行の中に

名もなしと里の翁は答へけり

あはれこの山はしきこの山
ふるさとのわか松島にくらべ見む
朝ぎりはれよ天のはし立

歌會のをり山路といふ題をさくりえて

きのふ夜狼人を食ひたりと
しづはかたれり木曾の山道

札幌なる友よりアイヌ語にては萩をシンケップといふといひおこせたるゆふべ雁のこゑきゝて

萩といふあいぬ語をおこせたる
友のかたより鴈はきつらむ

堀秀成翁の追悼會のをり手向けたるうた

この秋はなにを手向のくさにせむ
ゆふべの雨に萩はちりたり

ある夜辻車に乗りたるに車夫いたく年お

いて見えけれは

年おいてちからなけにも車ひく
あはれこの翁子やなかるらむ

乳母のもとより栗たこせたりければ

いつまでも子供と乳母はおもふらし
ことしの秋も栗とゝけきぬ

静岡なるある宿にて

しらずしてわれ宿りしに今朝見れば
窓はむかへりふしの芝山

ある畫師の賀年に室の松祝といふことを

君の如き筆をしもたば祝にも
かきおくらまし小松若松

故郷にかへりてよめる歌ともの中に

わか家はわがふるさとに非らされば
かへりても猶旅ねなりけり

ある山路にて

たふれたる松をそのまゝ橋にして
賤は通へり谷のあなたに

病重かりける時よめる歌ともの中に

父君よ今朝はいかにと手をつきて
問ふ子を見れば死なれざりけり

○

おくつきの石をなでつゝ獨りごと
いひてかへりぬ春の夕暮

○

やめる身ははかなきものよ人よりも
廿日おくれて衣がへせり

一〇四

去年の夏うせし子のことおもひいでゝ
かごの螢をはなちけるかな

○

紫

わが宿をとふ人たえてしをり戸の
かけがねさびぬ五月雨の頃

○

紅

たをりきてわれ手向けぬとなき人の
母にないひそ姫百合の花

○

集

何事もたのむ〳〵といひながら
わが手をとりて友はねぶれり

○

沈みたる錢のかずさへ見えにけり
地藏たゝせる岩の眞清水

○

いづかたに早く聞くらむほとゝぎす
日暮の里こまごめの里

○

歌

ひめ君の琴のしらべもかきたえて
御庭の牡丹はなしづかなり

○

反

月ふみて水鷄をきゝに出でませと
根岸の友は文おこせたり

○

古

ほとゝぎすなくべき時になりにけり
一日は訪はせこまごめの里

○

一〇五

たゝりありときり殘されしこの村の

一もと稙わか葉しにけり

○

鯉にとてなげ入れし麩の力にも
たちわかれたる浮草の花

○

城あとゝきゝにし岡に古瓦
ひろひて居れは雛子なくなり

○

さくら見に明日は連れてとちぎりをきて
子はいねたるを雨ふりいでぬ

○

我宿は田端の里に程近し
つみにもきませすゝなすゝしろ

○

移し植にし紅梅の花咲きにけり
もとのあるじに文ややらまし

○

醉ひたれて足は十文字の舟子等が
まいはひの裾にはるの風吹く

○

渡殿をかよふ更衣の衣の裾に
雪とみたれてちるさくらかな

○

賣家の札を掲げし門のうちに
さきたる梅よたれを待つらむ

○

ちら〳〵と櫻花ちるおぼろ夜に
女扇をわれひろひたり

○

山寺の石のきたはしおりくれば
椿こぼれぬみぎりひたりに

○

岩清水たちより見ればその底に
痩せしわか影老いしわか影

○

うかれ女を妻にすときゝし此家の
門田はいまた鋤きもかへさず

○

道のへに色よくさけるすみれ草
明日はたか子の手にかふるらむ

○

遠からず花の使もありぬへし

去年の瓢のちりや拂はむ

○

舟人も舟より出てゝこのあした
くみにきにけり千代の若水

○

色もなき花もにほひてなにとなく
旅おもほゆるきのふ今日かな

○

去年の春隣の翁にわれきゝて
接きし姫桃はなさきにけり

○

わか巣にと雀のはこぶ鳥の羽を
かろくもさそふ軒のはる風

○

一坪に足らさるうらの菜畑に
黄なる蝶飛び白き蝶飛ぶ

○

うちうてば石にも聲はあるものを
いつまでつらき心なるらむ

○

わが戀ふる歌てふものゝ人ならば
やせしこの身をあはれと思はむ

○

さきつゝくすみれたんぽゝなつかしみ
もとこし道を又戻りけり

○

岩かけに躑躅折らむとおりたちて
鶺鴒の巣を見いでつるかな

○

一たびは瀧となりても落ちつるを
またたちのぼる峯の白くも

○

つなかれてねふらむとする牛の顔に
をり〳〵さはる青柳の糸

○

瀧壺に落ちて沈みてまたうきて
椿なかるゝたにかはのみつ

○

田端にて根岸の友にあひにけり
蛙なくなるはるの夕くれ

○

さくらさく上野の山の道かへて

今日は谷中の墓めくりせむ

○

父はうせて子の代となりし春よりは
ちひさくさけり牡丹の花

○

血を吐きてうせにし友のおくつきに
あかき躑躅の花さきにけり

○

水上にをと女かかけ見えて
里の小川を芹なかれゆく

畵賛

手をおひて谷間にくるふいかり猪の
牙のひゞきにちるもみぢかな

○

京都金閣寺

よき種ときゝて買ひきて植ゑて見し
わがおろかさよ朝顔の花

○

歌

名もしれぬちひさき星をたづねゆきて
住まばやと思ふ夜半もありけり

○

反

春の日はまだまだ高したちよりて
よみてもゆかむ壺のいし文

○

古

庭の面をゆきかふ鶏のしだり尾に
ふれてはうごく花すみれかな

○

草鞋をばはきかへをれば菅笠の
上に椿の花こぼれきぬ

子のうせしをりよめる歌どもの中に

小屏風をさかさまにしてその中に
ねたるわが子よおきむともせず

紫

○

梅が枝に文をむすびてもてきたる
使の童年はいくつか

紅

ちる花のゆくへいづことたづぬれば
たゞ春の風たゞ春の水

集

○

今日うゑし菊の早苗おなじくは
しろき花のみさけよとぞおもふ

岩代の國なるある人の賀に寄山祝といふことを

千代までもさきくいませと君をのみ
われしのぶ山わすれずの山

天王寺のかたはらを過ぎける時

名は花子かばねは風間年見れば
まだ十七よあはれこの墓

歌

○

鴨ふたつねぶれるまゝに流れけり
ぬるみそむらむ春の川水

反

戀のために身はやせ〳〵てわがせ子が
おくり志指環ゆるくなりたり

大和紀行の中に

古

この里のあざなとまでもなりにけり
いく代へぬらむ二もとある杉

○

あし〳〵ゆく鶴のあゆみも春の日は
いよ〳〵おそくおもほゆるかな

○

おぼろ夜の月もふけぬとわが友の
かへりしあとに笛落ちてあり

○

ぬれなから椽にのほれる庭鳥に
音なき春の雨をしるかな

○

梅の枝文箱にそへて鶯の
はつ音の里の妹におくらむ

（完）

詩商人

谷　活　東

霞める山の山ふかく
花は咲けりと思へばや
幼きゆめの戯れに
昨日ぞ人をこひそめし。

ゆめのたゝちを言問へば
梅が花さくあかつきに
木の葉ちりしく夕ぐれに
かの一とせの過ぐるごと。

青女がいます青空に

風行く雲をさそふこと
田の面に影をうつしては
走り走れる思ひかな。

されば靜けき春の日は
花をさぐりついとまなみ
野にあけ山にあこがれて
我が世をこそは忘れしか。

さしも寂しき秋の夜は
虫のなくねを今さらに
人こひしやと思ひわび
涙か袖にちるつゆの

はかなきゆめに有明の
灯火ほうき枕邊や
消えゆく君か姿にも
別れあえぬは思ひかな。

思ひ流るゝふちせにも
やさしき月は宿りけり
宿れる月のいつしかも
曇れる時のありけるや。

ある夜秋風吹きすさび
黒雲空をとづるまに
思ひの木々の葉は散りて
心の野邊に艸枯れぬ

おのが身としもおぼえぬに
暗き闇路をたどりつゝ
歩めば長き秋の夜や。

再ひいづる明星の
影求むれどとこしへに
星さへあらぬ闇の夜を
我たゞ獨り歩みけり。

闇夜に梅が香はすれど
我が世に花は咲かざりき
只かの市に詩をうりて
望みもあらぬ詩商人。

只うま酒に醉ひ忘れて
花を貪る詩商人
花いたづらに赤けれど
時日の血しほ枯れし我身は。

隅田の夕

風かあらぬか吹き送る
雲の行衛はいづこぞや
身は墨堤のたそがれに
さびしき道を求めては。

しづみはてゝし夕日影
日影ぞ染むるあやぐもの
雲のたえまに宿りつゝ

ひかりもらせる明星や。
しづけき隅田の川水に
うつりて出る星かげの
上行く舟のかゞり火に
れもひをうつす心にも。

あゝ去りかたき恨かな
年の初めのれとづれに
とひてし君か心より
あゝ木枯は吹きすさび。

再ひかへるふゆの夜の
寂しき中にさわがしき
れもひは亂れくるひつゝ

家路も知らで辿るかな。
去年はうたひし君が歌
かのはるさめの墨堤に
花の香りをうつしたる
かさはふたりの合傘に

君は妻よとわれをよび
われは夫よと君を呼ぶ
そのあたゝかき戀の夢
ゆめやどらせし合傘の

かさは今はた人の手に
戀しき君をぬらさじと
此春をこそちぎるらめ

あゝ嫉ましの人の身や。
嫉みに狂ふこゝろにも
うらみの炎もえいでゝ
かの富士が根の昔にも
今の我身は似たりけり。

雲に隠るゝ富士が根よ
汝が恨みはいつ消えて
來る年ごとの春ぞらに
初日のかげを宿すらむ。

實に美しきなれが身は
靜けき空のとこしへに
樂しきゆめを結びつゝ

果しなき世を過すらむ。
あゝ我身こそ味氣なき
我世を送るいくとせは
隅田の櫻のはなのまに
汝が幸ある姿をやみむ。

兵士の妻

さゝ波よする岸の邊の
芦は枯れたる夕まぐれ
吹く風寒き湖の
岸の彼方の山蔭に
しづみ行く日を望みては
君が行くへを思ふかな。

身はうら若き少女子の
狹き心のそこよりも
餘りに多き思ひ出の
涙とこそは流れしか。
あゝ湖の水よりも
人の涙ぞ多かりし。

何をなくねの夕烏
後ろの森にさわぐ時
雲のたゑまに星かげの
一つ二つはみえそめて
我が世は暮るゝ大空に
み寺の鐘ぞきこゆなる。

遠き營所に送られて
昨日行きにし我が夫の
今宵は何を思ふらむ。
この湖の岸の邊に
わが佇むとえも知らで
今宵は何を思ふらむ。

鎮守の神よとこしへに
君が世治めたまひてよ
よし戰爭はあらばあれ
我が國人のつゝがなく
鎮守の神よとこしへに
君が世治めたまひてよ。

（完）

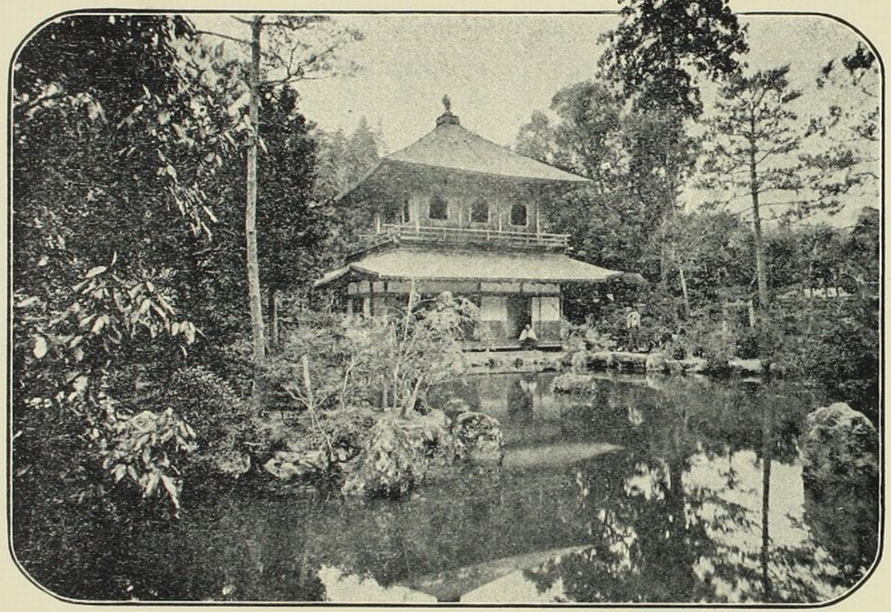
牧童の歌

山本露桑

一

羊を飼ふなる童ひとり
群れ〳〵追ひつゝ「今日も暮る」と
牧場にいそぐか逢魔が時を
葡萄のしづくに髪もぬれて
いましを待つなる姉を知るか。

野鳩は追ふとも蛇はうつな
今もし鎌首高くあげて
なれにせまりて炎はかば
木蔭にかくれて笛をとれよ
やすきを奪ふはかゝる痴者ぞ。



京都銀閣寺

森なるひじりの石によりて
木の實をさゝげつ雲をのぞみ
怪しき聲音ぞなれを呼ぶは
去れ〳〵木の實の餌にゆくな
そはなにのろひにもゆる聲ぞ。

鞭とり笛吹き群をよぶとき
やさしき羊に戀を知るか
心のやすきに空をあふぎ
星に感謝の聲をあげて
かくるゝ光に歌を思へ。

二

小羊ゆかず首うなだれて

ぬか毛かきなで歩めといへど
鳴くかつかれに聲音もひくゝ
暮も近きにはや艸をふめ。

夕ぎり深く野を包みはて
迷ひの室もいざ今よりぞ
灯火かゝけ鈴うちならし
さかしき祈すだまがなすは

月と星とのめぐみを享けて
天と地との幸多き子よ
雲は飯るにいましの友の
たゞずむ野邊の狹霧を思へ。

ゆかぬ羊に神の名説けよ
さは吾れゆきて星に告げて
なれがなやみを慰むべきに
待てさびしくも榎のもとに。

いかり

いくさ車をよそほひて
むなしや人はをたけべと
かうべに下る天つ日の
とはに光を誰れか見る。

光のあとを眺れば
いのちの岸はそばたちて
水は盡きせずあふれては

讃美の聲をたゝざりき。
見よ山の上海の上
白くかゞやくきらめきの
光は高く若くして
人のあふぐにまかせたり。
のぞみは長く朽ちずてふ
天の光にてらされて
歩みもかろく行くや彼方に。

夕べの星

夕べは見ゆる星二つ
ひとつの星は海におち

底の眞珠となりにけり
夕べは見ゆる星ふたつ
ひとつの星ば野に下り
冷たき石となりにけり
ひと夜野の道石を得て
熱あるむねにひめたれば
ふたゝび見ゆる星ひとつ
情ある星よ光あれ
海の眞珠よとこしへに
潮にかくれて人に示すな。

無花果

無花果守りて今日もたてど
落ちて碎くる數は多く
うまよ汁雜草を肥しゆきて
吾が肩かくるゝ程になりぬ。

小狐おふべき鞭はもてど
草叢うごかで小蛇も來す。
木蔭にゐよりて劣しき實に
幸なき此の身を夢となさん。

木の主たかぶり心おごり
鞭の手ゆるうしくひをなさば
運命は束の間足かせとなり
うつべき杖を加ふとぞいふ。

ほこれる男の子等道をあやまり
悔を殘すべき口を以て
いとむよ禮なく吾が木の實を
しかしてゆくべき道をとけと。

よみにぞ歩まん道は知らず
無花果くだちて腐り果てゝ
梢の小鴉たち去るまで
木蔭を守れば吾が世足れり。

（完）

養蠶

小杉椙邨

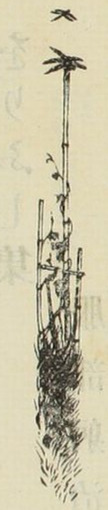
うゑなめしさとの新桑
瑞枝さしかげもとをゝに
しげりわふ若葉よろしと
しが父はかりつみほこり
おひかつるかたまを重み
まちをりて露うちはらひ
程ほどの笥にもりわけて
しが母は蠶屋に運べり。

きのふけふひたやごもりの
なつかしきその繭とぢめ

手もすまにゑびらの上に
すがやかに桑こきたれて
夏引の糸ひきゆの
こがひすといそはく夕べ

しかれこそわがせのきみ
垣ごしに我手なとりそ
いはふそのこかびの業そ
かしこしと諫めわぶめれ
蠶屋のゆふべを

（完）



をりふし集

服部躬治

紫紅集

いかなるなりになりけむ

梅も見ず柳も折らずこの春を
みだれこゝちにわれや過さむ

○

この春はさても過さむこむ春も
亦來む春もかくや過さむ

○

かくしつゝわが世終らむ君ゆゑに
われは世に在りたゝ君ゆゑに

○

君ゆゑに世にあるものをしかるべく
君にまかせむわが世吾命

○

吾命の全けむかぎり戀ひ〳〵て
あらむか君を見ずて死ぬとも

○

戀ひ〳〵て死なむもよしや君が名は
時じく胸を離れざらなむ

○

かくは言へどなほこの胸の安からぬ
それよ涙のたゆる時なき

梅の歌の中に

白梅の香をなつかしみ立ち寄れば
主は太刀を拭ひながら居り

○

追分の石こそなけれ梅が枝に
花ある方を南と思はむ

○

藪かげの一もと梅に花見えて
楢の小林なほ風さわぐ

○

夕月のほのめきそめし梅壺の
梅ちるかげに私語あり

○

碓の音のたえまにうめ散りて
門川のほとり風ゆるく吹く

ある時

様さきに掃き棄てられし草離は
誰に媚ぶとの青みなるらむ

人の許に

忍ひ泣きし夜頃ぞ今に忘られぬ
さりとも君が思はくの憂き

○

神ありと何たのめけむ神無しと
何恨むらむ何嘆くらむ

○

昨日わが折らむと思ひてさて止みし
薔薇の白きは散りはてにけり

○

朝風のそよめく庭の芝の上に
動かぬ影や何木なるらむ

○

まばらなる卯の花垣を力にて

たてる少女の眉重げなり

○

若葉さすしだり櫻の下かげに
小き苺の花さきにけり

○

胸の底に秘めておくべき秘事を
秘めもあへなきわれや何なり

○

露ふくむ背低楓に袖觸れて
あなや心のざわめきにけり

○

門のべの銀杏の若葉朝な〳〵
われにさゝやく秘事や何

○

枳殼の刺も恐れず日もすがら
黑き男蝶の垣根めぐれり

○

雨雲のまだはれやせぬむかつ丘に
のぼる旭の力なきかな

○

愚なる身をさしおきて社會に
在るもの皆を恨みつるかな

（完）

花の吟

渡邊文雄

紫

雨後花

朝日子や今のほるらし春雨の雫の山の花のあけほの

諸所花盛

紅

飛鳥山あす社花を見に行かめけふ日暮の里に暮して

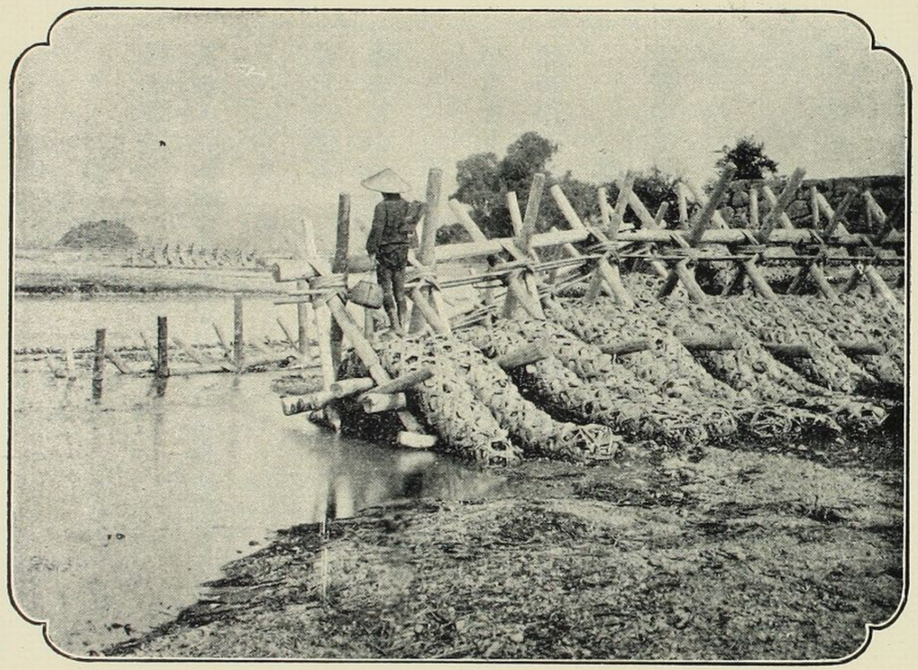
山花

集

世を捨てゝ登る山路に咲く花は心を春に返すなり鳥

堤花

筑波根も霞みわたりて葛飾の堤の櫻



武州多摩川

咲き初めにけり

名所花

古への大宮人は見えねども今も咲くなり

志賀の花園

隔水觀花

隅田川花のつゝみの曙を待乳の山に

ひとり見るかな

霞中花

春の日の長良の山の花や見む霞ふきとけ

志賀の浦風

夕花

見おろせば麓の里は暮れたれど花に明るき

山の通路

曉花

有明の月は霞にかげ消えて花の香寒き
春のあけぼの

閉居花

鶯のねぐら求むる聲はして雨靜かなる
花のしたいほ

（完）

牧兒の歌

武島羽衣

野路の夕川月冴えて
眞玉をそゝくさゞれなみ
渡る小牛の春にのりて
ゆくはいづこの賤ならむ。

あはれ催す夕ぐれに
うちながめつゝ嘯けば
いとゝいそかぬ小牛まで
心ありける あゆみかな。

雲わく峯にのぼりては

嵐に笛をすさひつゝ
花さく野邊にまじりては
小鳥とともに歌ふなり。

あしたに出る友とては
只此牛とこの小笛
ゆふべにかへる友とては
又此うしとこの小笛

塵のちまたをふまされば
げがれだにせぬ雙の足
こかねと名とを追はされば
くもりもあらぬれのがむね

菅の小笠に雨すぎて
折らぬに月はかゝれるを
桂かけむと世の人は
いづこの空にさわぐらむ。

谷間のいづみたちて
むすべは甘き水のあぢ
百のこがねに世の人の
替ふてふ酒も何せむに。

けはひなまめく柳かげ
よし浮れ男は醉はじよゝ
われはこの春をすみかにて
心のまゝにたのしまむ。

古郷

佐々木信綱

○

山かげにつゞく竹村桑ばたけ
わがふるさとに似たる道かな

○

遠くより石なげ入れてよろこびし
産すなの燈籠立並びけり

○

つばなぬきすみれつみつゝむかしわが
遊びし野べに子らのあそべる

○

まじめなる家のあるじと成にけり

石なげあひし幼な友だち

○

よろこびてたちむかへます伯母君の
れもはいたくもれとろへましぬ

○

稻村の中をめぐりてあそびつる
少女も今は子を抱きけり

○

むかしわがむだがきしつる藥師寺の
み堂のとびらなほくちずあり

○

水せきてめだかすくひて彼の人と
あそびし川は水あせにけり

○

たれなりやれもひいでねどふるさとの
野べ行く人のみしりたる顔

○

故郷のせどの小川に糸たれて
むかしの夢を見つる今日哉

○

かの人といさかひあひて泣かせつる
かのやぶがきはいづれなりけん

花くたし

同人と大宮に物しける日池邊の茶店に
つなぎたる猿を見たりて

とまり木をのぼりおりして長き日を
おなじことしてある小猿かな

○

春あきをいつともしらぬとまり木の
小ざるのかほに花ちりかゝる

○

吾前につどひよりきてさま〳〵の
顔を見すとやさるのおもふらむ

○

わびしとはおもはざらなむ世中に
つながれたるはなれ一人かは

○

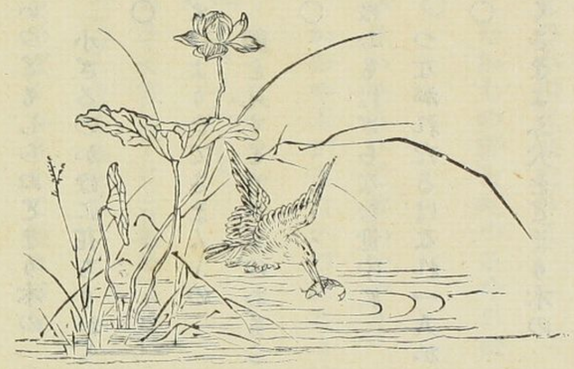
むくつけくさまよふ犬をとまり木の
上より見てはあざわらふかな

○

つどひるし人もちらほら去りはて丶

とまり木のうへにきゝとなく聲

（完）



竹外横斜

坂井久良岐

大丈夫が弓末振おこし鳥狩する
あだの大野に雪ふりにけり

○

あきさゐる川添小田の梅林
浮世にとほき春風ぞふく

○

上つ毛や高瀬の川の春の水
網曳く子らか影をうかべる

○

軒やれて柱かたふくすゝこりが
家の紅梅咲きやしぬらん

○

森村を七行く少女言とはん
汝も杉田の梅を見るやと

○

春淺き川添小田の梅ばやし
風の占めたる所なりけり

○

妹とわが中に据ゑつる文机の
鉢の紅梅はなさきにけり

○

歌人か煩杖つきてつく〳〵と
物れもふまとに梅かをるなり

角力のうた

石の上布留や男の見の打相撲ひ
雄々しきを見ん年の始めに

○

梓弓櫓大鼓の音聞けば
心たけりて腕ふるはるゝ

○

此場所は土つかであれな我好む
力士荒岩ゆるぎなくして

○

幕の内に今年入にし國見山
よくしてあれな年のゆければ

○

鳳凰がつねによくする泉川

此頃利かず老いにけらずや

○

久方の天の逆鉾さかしくて
今年もあらん盛りなる日を

○

さゝらがた小錦ちかく老ぬてふ
人のかたるをきくもうたてし

○

大關の醜の朝汐強よけれど
ひく人もなし醜の朝汐

○

諺の鬼の霍亂雲を突く
男の兒大砲今年病むちふ

○

大店の丁稚に似たる松の風
痩々生きて角力とるかも

○

常陸山は汝か苦手ぞ心して
角力よくせよ梅の谷關

○

徒らにこけを威して大蛇潟
高浪の伴老に老つゝ

（以上明治卅三年一月中作）

雑吟

○

柿の實のおつる軒端の村雨に
物おもひ居ればこほろぎのなく

宮崎來城が六年へて訪ひきぬるに

去年の秋君は死にきと人のいひき
われは今日も猶病みてあり

○

洞庭の海の秋風いかならん、
隣のうまや駒は肥えしを

○

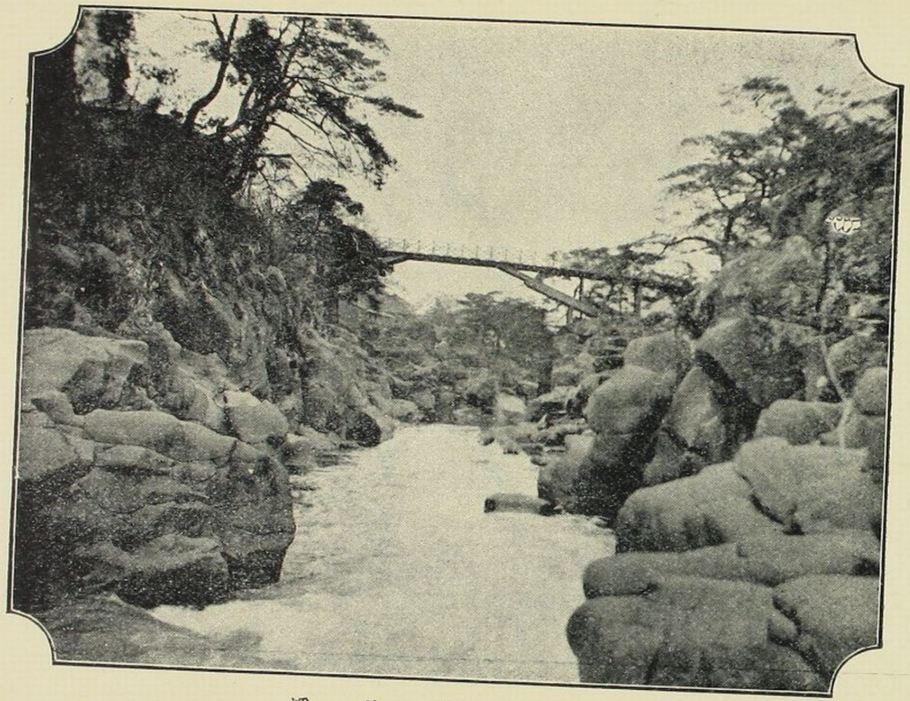
蜀の山大江の水益良雄が
月に泣く夜の秋にはあらずや

○

大學の業卒へし人犬に似て
嫁もとむとや市路にたもとほる

○

歌よみは罫丸なき人腰ぬけて
髯のみ白く謄るなき人



陸中巖美溪

枯野十首の中に

赤城颪鞍の上吹く眞倉賀の
佐野の枯野に日は暮れに鳬
高黍の枯れし痩村過ぎ行けば
唐の大野に胡沙の風ふく
大きなる熊の足跡二ツ三ツ
枯野の霜に殘る朝かな
霜白く草枯れ果てし大野らに
夕風なぎて月出にけり
川舟の泊てし枯野を一里ばかり
都へ急ぐ高麗の旅人

犬

黍焚きて夜寒を凌ぐ胡の家の
垣根を遶ぐり犬群れて吼ゆ

鹿

秩父より歸りし人の云ひけらく
幾夜か鹿の聲を聞つと

例の歌よめる中に

泥方の狸おやぢは穴の中に
尙人たぶらかす事はかるちふ

○

賤が刈る田中の朝臣は船長の
昔忘れず世に梶合はす

○

利の爲めに面かむ斗り怒る人
道に慣る我を狂るへりといふ

○

雲の上は穢がれ人多しうべしこそ

星も碎けて地に隕つるなれ

○

世を洗らふ雨は降らぬか朝に氣に
國は黃金の糞いきれする

○

此年も勘定合ひて錢足らぬ
我大御代の冬は來にけり

（完）

さくら

大塚楠緒子

春にともなふ汝れなるか
なれにともなふ春なるか
春故なれの富むらむか
なれ故春のとむらむか。
うすむらさきにうち霞む
雲のかふりはよるごとに
星の眞たまをうち添へて
汝がいたゞきを飾れども
位に長くほゝゑむな
榮華に痛く親しむな
驕りのうちにのろひあり
歡喜のうらになみだあり。
春かぜきたりさそひなば
優しくされよそらさして。
はるさめ來りさそひなば
優しく下りよ地のうちに
さらば櫻と人なづけなむ

ちひさきゆめ

小き夢

秋の心は解かねども
楓に似たるたなそこに
乳さぐる兒のねぶりかな。
秋かぜかばふ袖の内
母の涙に洗はれて

小さき胸よ何を夢みる。

さゆり花

蟠なくはなやかに
さえづり交す鳥のうた
かぐはしき野の片隅に
しばしの命わかたれて
無言にほふさゆり花
もたげかねたる花びらに
露の重をうちやどし
なにをか汝れは獨泣く
その憂へなきその春の日に。

はつ戀

わかき血おどる胸の底
ひそかにかゝる琴の絲は

知られぬ指に彈かれて
ふるへ初めけりいつしかも

白きさゆりのひと重
深江の色に染められし
少女心のわづらひを
あゝまもりませ戀の神。

罪

弱き心につけ入りて
思のまゝに惑はして
消すこと難き恐ろしの
疽のあまたを鮮やかに
その身に深く刻みいれ
憎き惡魔は逃げゆきぬ

空しきものを在るがこと
われに見せしは皆彼れが
咒ひたくみし術なりき。
行かれぬ道のしるべして
かゝる境にわれを捨て
憎き悪魔は逃げ去りぬ

天地のもの皆我を
責めて追ふ聲はげしきを
あゝその土よ隱るべき
所を作りうち窪め
とばかりわれをさいなみし
憎き悪魔の行へ何處ぞ

（完）

梅雨一束

小出粲

さみたれに小田の堤やくづるらん
さと人とよむ聲きこゆなり

○

さみたれはいくかへぬらん取かへて
きたるころもゝあかつきにけり

○

さみたれの窓にくゆらすたき物の
ひとりもけふはくる人のなき

○

さらぬたにしめりかちなる梅雨を
ふねのうちにもくらす頃かな

○

釣舟のかけたに見えぬなみの上に
たゝよひわたるさみたれの雲

○

舟窓をあけてはみれと梅雨の
雲の外には見ゆる山もなし

○

海士の子か小舟棹さしかはくちに
なかれ木ひらふさみたれの頃

○

さみたれに塵も藻屑もなかされて
いよ〳〵きよし浦のまさごぢ

○

昨日までいつをはてとも見にざりき
はるれははれぬさみたれの空

○

花あふひ末までなになりぬれと
はてこそ見えねさみたれの空

○

ふらぬ日もふる日もありて中々に
はてなくなりぬさみたれの空

○

さみたれもはるゝ日近く成ぬらん
雲のかけころうこきそめけれ

（完）

瀧園百首

黒田清綱

たつねきてきけは山路の杜宇
わかためになくこゝちこそすれ

○

ひとりしてきくにはをしき初音かな
わかかくれかのやまほとゝきす

○

ほとゝきすなく一聲をきゝしより
はしめて春をわすれけるかな

○

足引の山より出てゝほとゝきす
みやこの空にいまそなくなる

○

早苗とる田中の里の杜宇
しづか小笠の上になくなり

○

いにしへの關屋の跡をほとゝきす
いかに知りてか名のりゆくらん

○

しばらくは駒ひきとめて杜宇
なきつる方をなかめけるかな

○

わか宿は山ちかけれは杜宇
鳴かぬ夜もなしきかぬ夜もなし

○

大方は山にかへりてほとゝきす

のこり少なく成にけるかな

合歡木

何事もゆめなりけりとねふの木の
ねふりかちにて世をや過らん

戀の歌

うちとけて逢初し夜のうれしさを
ゆめとやいはむ現とやいはむ

○

かくはかりれもなれなから下紐の
いつまてとけぬ心なるらん

○

わか戀はあはてのうらのうたかひを
ひろひかちにて月日へにけり

○

かきほなすひとの言草しげらずは
わかなかみてもたえさらましを

（完）

紫紅集　終

明治卅三年十月八日印刷
明治卅三年十月十二日發行

不許複製

東京市牛込區下宮比町三番地
編輯者　栗島山之助
東京市神田區錦町二丁目三番地
發行者　岸野英一
東京市麴町區中幸町一丁目五番地
印刷者　多田三彌
東京市麴町區內幸町一丁目五番地
印刷所　惠愛堂
東京市牛込區神樂町三丁目六番地
盛文堂
東京市神田區錦町二丁目三番地
發兌元　勉强堂
東京市神田區裏神保町六番地
同　高岡書店
東京市神田區表神保町三番地
同　東京堂
東京市神田區雉子町十番地
特約大賣捌元　岡崎屋

村上井上兩博士の所見を論ず●第四章福澤翁の修身要領を論ず●第五章國家本位とは何ぞや●第六章個人本位とは何ぞや●第七章倫理の主觀的方面に就て●第八章倫理の客觀的方面に就て●第九章宗教論●第十章倫理政策と倫理學との別及相互の關係●第十一章本邦將來の發達に關する意見●

文學博士故小中村清矩先生遺著（十月上旬出來）

國史學の栞

全一冊和裝美本
正價金五十錢
郵稅六錢

此書は小中村翁が上古より德川の末年に至るまでの國書を解題して之れに對する短評を加へ國史を學ぶ者の栞とせるものにて博士が遺著として曾て故舊に頒たれたる書なり中學以上の學生諸君は勿論苟も國史に志ある學者受驗者等最良の參考書なり其目次左の如し

●第一章總說●第二章正史類●第三章雜史類●第四章軍記類●第五章武家記錄類●第六章通史類●第七章朝儀に關る類●第八章有職古實に關る類●第九章系傳に關る類●第十章地理に關る類●第十一章古史類

發兌元　東京神田區錦町　勉强堂書店
發賣元　東京神田區神保町表　東京堂書店

文學博士故小中村清矩先生遺稿（十月下旬出來）

官職制度沿革小史

全一冊 菊判洋裝美本
正價金七十錢
郵稅拾錢

故小中村翁が古典に通達せられたるは天下の知る所なり 本書は博士在世の折後進者の爲として親しく筆を執られたるものにして上古より近世德川職制に終る引證正確且つ文章平易なるを以て何人も會得せらるべし學者教育者は勿論苟も史學に志ある者としては慥かに一頭地を拔く者あるを信ず其内容は大略左の如し

●第一編建國より孝德天皇の維新に至る ●第二編孝德天皇より鎌倉幕府以前に至る ●第三編鎌倉幕府時代 ●第四編京都幕府時代 ●第五編戰國時代 ●第六編江戸幕府時代

文學博士 元良勇次郎先生著（十月中旬出來）

現今及將來之 倫理と宗教

全一冊洋裝菊判
正價金四拾錢
郵稅六錢

本書は博士最近の著にして方今の如き倫理宗教の晦迷時代に於ける唯一の燈臺なり宗教家教育家は勿論世道人心に益する所あらんとする諸彦は速かに一本を購ひ早く其疑を去れ本書の價値如何は贅言を要せざる所其は左の目次を見てこれを知らるべし

●第一章緒論 ●第二章吾國の思想と世界の大勢との關係 ●第三章

理學士 近藤清次郎先生
理學士 池田清先生
共著

物理計算法解說

全

近刊

理學士 池田清先生
理學士 近藤清次郎先生 共著

化學計算法解說 全

洋裝頗美本 代價金卅五錢 郵稅金四錢

計算の化學を學習するに必要なるは已に識者の唱導する所なり然れども方今初學者之れが計算に苦むものあるが如し蓋し此の計算法を解說する書の我邦に行はるゝもの極めて少く偶々之れあるも未だ適當と稱するに足るものなきによる豈遺憾ならずや之れ弊店が斯學專攻の兩學士に此の書の編纂を懇請せし所以なり而して兩學士此の委囑を快諾せられ深く普通教育の現況に考へ以て本書を著述せられたり書中說く所高遠に馳せず專ら之れに關する智識を充分に啓發せしめんとを務め行文亦平易明晰たり故に一度本書に就き學習すれば容易に計算法の一般を理解するを得べく兼て斯學講究上大に益するとあらん加ふるに体裁の輕便なる價の低廉なるは他に多くその比を見ざる所なり故に本書は中學程度の學生は勿論文部省檢定試驗及び諸官立學校入學試驗を受けんとする者には必讀の參考書なり

發行所 東京市牛込區神樂町三丁目六番地 盛文堂書店
同 神田區裏神保町六番地 高岡書店

亘理章三郎君著

試驗と修養

洋裝美本 正價金十八錢 郵稅金貳錢

今日の學問界に試驗あらざるなし、青年學生の煩慮する所、教育家の苦心する所、又實に試驗ならずや、試驗とは如何なる者か、試驗と修養とは如何なる關係あるか、如何にして修養し、如何にして試驗に對すべきか、是れ實に深く注意し、切に攻究す可き問題ならずや、本書は著者が實際の經驗に依り、最も懇切に、最も眞實に、此問題を解釋したる者にして、青年學生並びに教育家必讀の書なり

◎副島伯之肖像 ◎德大寺內大臣題歌 ◎大隈伯序
◎李鴻章序 ◎勝海舟伯題字 ◎片淵琢編纂

副島先生 蒼海閑話

洋裝美本全一冊 正價金二十五錢 郵稅金四錢

副島種臣先生は明治の大元勳にして、宏識明才の人物たるは、今更贅言を要せざる所、今や齡古稀を超え、淡然世に求むるなくして、高風一世に超絕す、頃日閑を得て先生に教へを乞ひ以て本書を成す、其收むる所は教育、宗教、歷史、哲學、處世、經歷等社會の多面に渉りて、人生百般の現象を觀察して餘蘊なし、先生の思想は、海の如く、話端津々として趣味深し、其の眞に先生に欽慕するものは、譚論の勞を吝む勿れ

發兌元 東京市牛込區神樂町三丁目六番地 盛文堂書店

定價金三拾錢　郵稅金四錢

菊花の隱逸にして清麗高節ある茶山花の丹紅にして單瓣幽艶なる水仙の清裝にして淡泊なる寒梅の菩節にして君子の風ある皆本集に收むる所の諸大家の文に比す三宅雪嶺の勁にして節ある水仙の清裁淡泊なるに似たり福本日南の論鋒一瀉千里なるは茶山花の單瓣幽艶なるに似たり藩合の雅麗なるは菊花の隱逸にして清麗高節なるに似たり其他木内天眠の筆鋒縱横にして白馬の原野に走るか始く中西の義論正大にて韓蘇を殘き服部誠一の奇にして變化ある行雲流水の如く中州三島翁の規矩順序ありて訓錬ある兵士の進退するか如し皆篤學の士か座右に供して作文の摸範とする名作名文此の編に收たり一讀の勞を辭せすして本編の妄なちさるを判せよ

發兌元

東京市牛込區神樂町三丁目六番地

盛文堂書店